新年あけましておめでとうございます。
今年もどうぞよろしくお願いいたします。
お隣り、前後ろの方々にも挨拶いたしましょうか。
前奏がありますので、黙想のうちに心を静め、主を待ち望みましょう。

「幸いでありたい」

詩篇１：１－４
January.1.2025

詩篇１：１－４（パワポ）

Preface

詩篇という聖書の最も大きな特徴は、そのものずばり、「すべての内容が詩という形式を用いて書かれている」ということだと思います。
詩でありますので、詩を書いた詠い手たち自身の思い、経験、人生観、または哲学がそこには表現されています。
「詠い手たちのその明確な人生観や物事を見る目を培った神の教えをどのように悟っていったのか」、また、「神様は、どのようにして詩篇の詠い手たちの経験を通して、神の方法をより深く悟ることが出来るように導いていかれたのか」というようなことが、詩篇全体に記されています。

そんな中詩篇１篇は、聖書の中で最も多い分量の詩篇１５０篇全体の内容をまとめているだけでなく、「聖書６６巻すべての内容要約していると言っても過言ではない」と言われたりもするような神の言葉です。
そのような洪大な内容を含んでいる御言葉ですので、知恵も知識も人格も度量も言葉も足りない私如きに、その豊かさを語り尽くせるとは到底思えませんが、その素晴らしさを皆でともに１年間歌い続けながら、神の恵みとあわれみによって、聖霊様の助けによって味わわせて頂きたいという一心で、今年の主題聖句とさせて頂きました。
今日の元旦礼拝を含めて３，４回に渡って、詩篇１篇の恵みを分かち合っていきたいと思っています。

Part One

聖書全体を要約しているとも言われる詩篇１篇ですが、では聖書とは、一体全体、何を語り、何を教えてくれているのでしょうか？
地理や地質学上の問題から、歴史、王たちによる戦争や民族同士の紛争、人の誕生や結婚や死など、色んな話が聖書の中には出てきますが、聖書が語ろうとしているメッセージはただ一つだと思います。
神と言われるお方との関係の中で人（人間）を見ること、その神が私たちと私たちの救いのためにどんなことをされたのかというメッセージですね。
詩篇全体がそれを語り、詩篇１篇もその聖書が語ろうとしている主題に関心

を集中させております。
　つまり、「この世を生きる人々の生き様について、聖書が教える本質的な内容をまとめたもの」とも言えるのが、詩篇１篇なんだと思います。
　「私は今、神とどういう関係にあるだろうか？」ということをしばし立ち止まらせ、考えさせるような御言葉ですね。

Part One

　私たち今、２０２５年という新しい年を迎えておりますが、新年を迎えますと、何だか気持ちも新たになるような気が致します。
　ところが、旧約聖書の伝道者の書１：９というところを見ますと、「日の下に新しいものは一つもない。昔あったものは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる」という神の言葉があります。

　確かに、よくよく考えてみますと、この世の中には、新しいことは何一つないように思えます。
　もちろん、毎年のように新製品や最新版が登場し、形や方法などの外面上の見てくれにおいては変わりがあるかもしれませんが、それを用いて人間活動を行う人の中身・内容においては、今日を生きる私たちと過去に生きた人々に違いはないように思えます。

　詩篇の著者たちが生きた時代の人々が探し求めていたものと、今日を生きる私たちが探し求めているものには違いがないということが、詩篇１篇に詠われています。
　それは、「幸い」です。「幸せ」です。「幸福」ですね。
　新年を迎えて大概の人が思うことは、「今年１年幸せな年でありますように」ということだと思います。
　昔も今も、人々は、「幸い」を探し求めています。
　「幸いでありたい」と願います。
　幸いがどこにあるのか、幸いとは何なのか、幸いだと言われるものがあれば手に入れたいし、幸いだと言われるところがあれば行きたいし、幸いだと言われる体験があれば体験したいし、幸いだと言われる地位があればその地位に上りたい。
　昔も今も、「幸い」こそ、人が探し求める不変の求めでしょう。
　詩篇１篇の詠い手も、このことをよく分かっており、彼自身も、「幸いでありたい」と願っているからこその「幸いなことよ」という書き出しから、詩を始めたんだと思います。

　時代を問わず今に至るまで、人類全体がいつも探し求めているのが、幸い、幸せですね。
　「人生、歴史、文明のそのすべては、幸いというものを追求してきた努力以外の何ものでもない」と言っても過言ではないように思います。

誰一人として、不幸であることや悲惨であることを望む人はいませんし、誰もが喜びを求め、楽しみを求め、幸いを探し求め、彷徨っているという事実において、昔も今も変わりはなく、昔も今も同じです。

私自身を振り返っても、小さい頃から色んな夢がありましたが、その夢というものの中身・内容は、「その夢が叶ったら得も言われぬような幸せがあるんだ」ということだったと思います。
「勉強して、いい学校に入れば幸せがある」、「運動を頑張って、優勝すれば幸せがある」、「良い人に出会えば幸せがある」、「あの車を、あの家を、あの道具を、あの食べ物を、あの人を、あのお金を、あの名声を手に入れれば、幸せになれる」と、結局のところ、すべての目標とかゴールに期待していた中身は、幸いだっと思います。

では、なぜ、人はそこまで幸いを求めるのか？
それは、世の中変わっているようで、変わったのは中身ではなく、見てくれ、形式、形だけが変わり、変わらず嫉妬に溢れ、憎しみに溢れ、戦争があり、競争があり、比較があり、悪行があり、それらに失望しているからですよね。
昔は大砲が恐怖の対象だったのに、今は、核爆弾とか、サイバー攻撃とかが、恐怖の対象になっていて、変わったのは形式だけで、その中身は恐れと失望にまみれています。
この不確かな世を生きる私たち人間が直面している問題において、昔も今も変わりがありません。
解決出来ていないということにおいても、変わりがありません。
未だに、幸いを求めて彷徨っているという面において変わりがありません。
正に、「日の下に新しいものは一つもない」ですね。

「日の下に新しいものは一つもない」という世界にあって、私自身、なぜこの詩篇１篇にこんなにも心惹かれるのだろうかと理由を考えますと、この御言葉が、神さまご自身の教えであり、私自身がこの御言葉が教える幸いを体験させて頂いているからなんだと思います。

Part Two

すべての学問は哲学に通じるなんて言われたりすることもありますが、哲学者たちが、いやある意味私たち人間すべてが哲学者だと言えるかもしれませんが、その哲学者たちが追求してきた共通の主題は、「幸い」です。
「どうすれば、理想の世界ユートピアを作れるのだろうか？　幸いになれるのだろうか？」ということを考え捜してきましたが、そのすべての探求は、所詮人間の言葉でしかなく、物事を根底から変える結実を見ることは未だにありません。
複雑になるばかりです。
ややこしくなるばかりで、分かる人にしか分からない。

いや、本当に分かっているのだろうかという堂々巡りをしているように感じます。

そんな幸せを巡る堂々巡りの世界に、この詩篇１篇が、神さまが私たちに下さる幸せについての処方箋です。
その処方箋の内容は、聖書と親友になることです。
聖書という神の言葉と親友になることです。
神の言葉と親友になるということは、神と親友になる密接な関係になるということでもあるでしょう。
人間関係においてもそうだと思いますが、言葉を交わさない人と親友であれるわけはありませんし、心のうちを深く話せば話すほどに、聞いてもらえば聞いてもらうほどに、交わし合った言葉を心のうちに巡らせれば巡らせるほどに、その人との仲は密接になっていきますし、その人を知るようになります。
もう一度詩篇１：１－２を読んでみます。

詩篇１：１－２（パワポ）

神の言葉を思い巡らすこと、神の教えを反芻すること、聖書の言葉を口ずさむこと、これが、幸いについての神の処方箋です。

恥ずかしながら私は、聖書の言葉が神の言葉であるということは分かっていましたし、信じていましたが、神学校に入る前まで一度も聖書を通読したことがありませんでした。
聖書の言葉がそのものが幸いだとは思えず、自分の追い求める幸いを手にするための道具、利用するもの程度に思っていたように思います。
神学校に入ってからは、嫌でも必要に駆られて聖書を初めから毎日少しづつ読んでいきましたが、聖書を読んでいく中で、ずっと心のうちに思い浮かんでくる思いは、「ああ、これは、今まで読んで来て人の手によって書かれた本とは明らかに違うなあ」ということでした。
「聖書は、他のどの本とも本質的に、絶対的に違う書物です」と神学校の学びの中で教えられ、その教えに１００％「アーメン」と言えるようになったことに、幸いを覚えました。

聖書は人間の本ではなく、人間が作りだした物でもありません。
人が創案したものでもなく、人の考えを列挙したものでもなく、そういう類の範疇に属することもありません。
聖書は、神の啓示です。
いつでも神の啓示であって、この２１世紀においても変わらず神の啓示です。
以前においても、聖書は切実に必要でしたし、今も、この世界に必要なのは、正に聖書です。
いや以前よりもさらにもっと切実に、聖書が必要な時だと思います。

なのに、この聖書の御言葉を本当に私の幸いとしているだろうかというのは、ずっと昔から変わらない私たちの課題であり、今も変わらず最も深刻な神様からの語り掛けではないかなあと感じております。

Part Three

聖書の面白いところは、それぞれの時代を生きた人々の体験や経験をもって，その教えを確証しているということです。

ただの机上の空論ではなく、その教えを人が実際に実践したのか、実践しなかったのかによる成果や結果まで含めて、神さまがご自身の言葉としてお語り下さっているというのが、聖書の面白い特徴だと思います。

個人の経験が記されており、民族や国々の経験が記されており、歴史が記されています。

私たちは誰でも、面白いことに小さな子供でも、自分が一番物事良く知っているし、賢いし、他の人とはいい意味で違うと考えますが、聖書に記されている歴史を顧みますと、「日の下に新しいことは一つもない、皆同じ失敗を犯し、皆同じことで悩む」ということを痛感します。

人は、時代に関わらずいつでも、昔も今も何ら変わらない苦境を生きてきました。

そして、そのような苦境から解放してくれる幸いを、幸せを、幸福をずっと探し続けてきました。

だからこそ、人々や国々が、悪しき道と正しい道、偽りの道とまことの道についての実体験を語ってくれる、この聖書の記録を顧みることがどれだけ有益なことだろうかと思うのです。

「まさにこれだ！　ついに捜し当てた！」という聖書の登場人物たちの歴史的な実体験ですね。

聖書の面白いところは、神が語って、神がなさって、神だけですべてを成したということで終わるのではなく、人が経験し、人が思い、人が考え、人が悩み、人が実践した、または実践しなかった実体験・リアルまで含めて神の言葉として語って下さっているということです。

詩篇全体がそうですし、使徒パウロも、「神様は、神様お一方だけで神さまをやっておられようとはこれっぽっちも思われず、私という弱く最も小さい者と共にあって、初めて神であられようとされるお方である」と、神の愛と徹底したそのご配慮に恐れ多いと思ったことがある程です。

神の言葉である聖書の言葉を信じ、実践し、または信じず、不実践だった人々の記録、その生々しい実体験歴史が、聖書には記されています。

だからこそ、私たちは、聖書から学べますし、教えられるわけです。

Part Four

そうして聖書は、私たちに、根本的に大切で重要な道を明確に提示し、私たちに選択するよう導いて行きます。

私たちの人生を、聖書がどのように言及し取り扱っているかと言いますと、基本的にとても単純明快です。

聖書が聖書たる所以は、その言わんとしているメッセージ・主題は至って単純だということだと思います。

それに反して、人の言葉は複雑です。

難解な専門用語を羅列し、その用語を複雑に絡み合わせ、あたかも何か物凄いものがそこに出来た・あるかのように見せようとします。

なぜならば、分かっている風を装いたいからだと思うんです。

でも聖書は、感謝なことに至って単純です。

直線的で、平易で、色んなことで錯綜し、絡み合い、入り乱れ、もつれて、こんがらがっている私たちの人生における問題を、一つの大きな問題として集約してくれるのが聖書です。

聖書は、いつでも、どんな時も、問題を明確にしてくれます。

聖書は、「あなたがたに、二つの道がある。ただひたすらに、二つの道しかない」と語ります。

神の道かサタンの道、アベルの道かカインの道、ヤコブの道かエサウの道、ダビデの道かサウロの道、ペテロの道かユダの道、細く狭い道か広く大きな道、この二つの道しかないと、物事を集約します。

詩篇１篇にも、正しい者と悪しき者、主のおしえを喜び口ずさむ人とそうではない罪人が登場してきます。

人はいつでも、この二つのどちらにかに属するようになっていると言います。

問題を前にして、主の言葉の前に跪き祈りながら、自分という人を神の前にあって見つめ直すのか、問題を前にして、神ではなく人を見、人にぶつかり、人とにらめっこをし、人に助けを求め、人のせいにしながら、自分の正しさを誇ったり、自分の無力さを嘆いたりするという二つの道。

聖書は、人生における複雑に絡んだ問題たちを、単純で直線的に露わにし、その複雑な問題を一つにまとめ上げます。

「果たして、私は、どっちの道に進んでいるのだろうか？　神の道なのか、人の道なのか」という問題に集約してくれる、実に二つとない書物だと思います。

もちろん、だからと言って、聖書が単純な話一つだけ書いて終わるのではなく、色々な実例を挙げて、問題の真実を浮き彫りにしてくれます。

その実例の宝庫が、詩篇１５０篇全体でもあります。

そして、それを要約してくれているのが、詩篇１篇なんだと思います。

Part Five

私たち皆が、神さまの愛がどれほどのものなのかを悟ることが出来れば、どんなにか素晴らしいことかと思いますし、神さまは、そのために、弱く、無知な私たちの視線目線に合わせてようと、下りてこられました。
その神様が私たちの視線目線に合わせなさったみわざの記録が聖書の記録だと思います。
よく、「何でこんなにも聖書の中に、戦いや争いや嫉妬や戦争や殺しの話が出て来るのだろうか？」と、疑問を持たれることがありますが、それは、ヤコブの手紙に書かれているような戦う欲望に満ち溢れている狂暴な私たちが理解できる水準に、私たちが神さまに合わせることは到底出来ないので、神さまが合わせて下さっているからですね。

ヤコブの手紙４：１－４（パワポ）

神は、神の敵となっている私たちのところに下りて来て下さり、十字架にまで架かられ、私たちの手によって殺されまでしました。

神様は、例え話や実話や実体験や歴史的事実をいうありとあらゆる視聴覚教材を用いて、そして、その視覚教材は、残念ながら私たちが子どもたちを教える時に用いるような綺麗な可愛い絵で描かれたような美しいものよりも、見るに堪えない、目を背けたくなるような生々しい視聴覚教材の方が、遥かに多いのが事実ですが、それらを用いて、私たちをもってして真理を明確に悟るように導いて下さいます。

人々の実体験が籠った神の歴史が、この詩篇全体に記されており、また今年の主題聖句詩篇１篇に集約されております。
悪しき者の道と正しい者の道、悪しき者のはかりごとと主の教え、流れのほとりに植えられた木と風が吹き飛ばす籾殻、否定的な道と肯定的な道、滅びの道と栄えの道。
真に正しいこと、真に善なることを示すために、良いことだけと取り上げるのではなく、悪いことも取り上げながら、その違いを浮き彫りにして生きます。
幸いな人と幸いでない人の実例を照らし合わせながら、その明暗を、コントラストを明確にしていきます。

そうして明示された幸いとは何か？
誰も望み、誰もがそうありたいと願っている人にとっての幸いとは何か？
「主のおしえを喜びとし、昼も夜も、その教えを口ずさむ人が幸いだ」と言います。
そして、それを実践に移している人は、そうしていない人には理解出来ない幸いを生きているという実感籠った告白を歌として表現されています。

私たち誰もが幸いを願います。
そして聖書は、幾らでも人は幸いになれると教えます。
幸いは可能だと教えてくれます。
そして、その幸いこそ、神の言葉だと言います。

詩篇１１９：７２，１０３（パワポ）

こんな幸いを味わう、頂く、体験する１年でありたいと願います。

神の言葉が幸いであるということを経験する一助になればと２週間ほど前にお配りしました聖書通読表が受付に置いてありますので、まだ受け取っておられない方、どこかに行ってしまった方がいらっしゃいましたら、ぜひお持ちいただければと思います。

今日から、この聖書通読表が始まっていますので、もし心新たに聖書の御言葉に接していきたいと思われたら、ぜひご利用ください。
決して、強制ではありません。
心が「読みたい」と向いたら、ぜひ、ご利用ください。

お祈りいたします。
祝祷：詩篇１：１－２